

# 『肖柏口伝之抜書』の諸本について

——『榻嶋暁筆』の所収の一本をめぐって——

小 椋 愛 子

## 一、はじめに

『榻嶋暁筆』諸本の中には、連歌伝書の『肖柏口伝之抜書』を収録しているものがある。『榻嶋暁筆』の諸本は、三形態  
Ⅱ二十三巻本、二十巻本（二十三巻本の巻三・十・十一が欠巻）、『榻嶋暁筆抄』（別名「暁筆抄」、以下、「抄本」とする。  
二十三巻本の巻四・五・六・七・八・十八・十九・二十が欠巻）が知られており、『肖柏口伝之抜書』は、二十三巻本の巻  
十五「食事」の末尾に収められている。（二十巻本では、特定の三巻を欠くため、巻十二に該当する。）また、『榻嶋暁筆』  
諸本で、二十三巻本、二十巻本では、この『肖柏口伝之抜書』を所収するものとしないうものが混在しており、「抄本」で  
は、管見に入った中では収録されているものは見あたらない。「食事」の巻という全く関係のない巻に収録されていること  
から、後からの挿入とも考えられるが、連歌伝書が一冊全て、説話集に収録され、なお、それが一冊の説話集として書写  
されていたことは注目すべきことと思われる。

本稿ではこの『榻嶋暁筆』に収録されているものが、『肖柏口伝之抜書』諸本の中でどのような位置づけにあるのかを考  
察したい。次章で述べるが、『肖柏口伝之抜書』自体の先行研究は、ほとんどないため、まずは、『肖柏口伝之抜書』諸本

を分類し、比較するところからはじめたい。また、『肖柏口伝之抜書』に引かれる句から、その成立時期を検討することとする。

## 二、『肖柏口伝之抜書』について

ここで、『肖柏口伝之抜書』の先行研究を見ていくことにする。『肖柏口伝之抜書』自体を論じた論文は管見の限りでは確認できず、『宗養連歌伝書集』（古典文庫<sup>2</sup>）の翻刻の解説や辞典（『俳諧大辞典』、『俳文学大辞典』、『日本古典文学大辞典』等）の立項のみである。

辞典類の記述から、『肖柏口伝之抜書』は、奥書に二系統あること、『肖柏伝書』の後半と内容が同一のため、後半が独立して流布したものと<sup>3</sup>考えられていることや「宗長てには」の類本<sup>4</sup>とされていることが窺える。

まずは、『肖柏口伝之抜書』の諸本を比較・分類し、『肖柏口伝之抜書』の有り様や他書との関係をも考察してみたい。

## 三、『肖柏口伝之抜書』の諸本について

ここで、今回考察する『肖柏口伝之抜書』諸本の確認をしておく。「静嘉堂本」については「静嘉堂文庫」に問い合わせたところ、『国書総目録』の誤りで、所蔵していないとの回答を文書で賜り、確認はできなかった。また、「京都大学付属図書館蔵谷村本」は、『肖柏口伝之抜書』の他、『秘袖抄』、『世俗』等から抜きだしてまとめたもので、内容も大きく異なり、奥書もないため、除外した。

『肖柏口伝之抜書』の諸本は、巻末の記載とその内容（項目数）から大きく二系統に分類できる。まずは、（本）奥書に

基づいて分類をした。また、同じ系統の中でも奥書でさらに分類ができる。諸本の分類と、その本奥書、奥書を次に記す。

第一類「宗養本」系統（本）奥書に「宗養」の名を有するもの

(A)類（奥書に「玄仲」の名を有するもの）

①広島大学文学部国文科研究室蔵本（以下、「広島大学本」とする）<sup>5)</sup>

本奥書「此外雖多先書拔進覽之候。努々不可有他見者也。四月三日 宗養」

奥書「此一冊者、近衛禪閣龍山公、毛利入道前中納言宗瑞<sup>五</sup>被遊遣次書写畢。慶長十八年極月中旬 玄仲」

②林田良平氏蔵蝸牛廬文庫本（以下、「蝸牛廬文庫本」とする）【国文学研究資料館・マイクロフィルムによる】

本奥書「此外雖多先書拔進覽之候。努々不可<sup>マ</sup>他見者也。四月三日 宗養」

奥書「此一冊者、近衛禪閣龍山公、毛利入道前中納言宗瑞<sup>五</sup>被遊遣次書写畢。慶長十八年極月中旬 玄仲」

(B)類（奥書に「玄仲」の名が見えないもの）

③明治大学付属図書館蔵毛利文庫本（以下、「明治大学本」とする）【明治大学図書館・マイクロフィルムからのCD-ROMによる】

本奥書 なし

本奥書 なし

奥書「此外雖多之先書拔進覽之候。努々不可有他見者也。四月三日 宗養判」

④妙法院本【東京大学史料編纂所、マイクロフィルムによる】

本奥書「此外雖多之先書拔進覽之候。努々不可有他見者也。四月三日 宗養判」

奥書「此一冊以直衆庵本率写之了。時元和七年五月上澁日」

第二類「玄仍本」系統（奥書に「玄仍」の名を有するもの）

(a) 類<sup>6</sup>

⑤ 富山県立図書館蔵・志田文庫本 奥書「天正六霜月下旬 玄仍」【国文学研究資料館・マイクロフィルムによる】

⑥ 宮内庁書陵部蔵・斑山文庫本 奥書「天正六霜月下旬 玄仍」【国文学研究資料館・マイクロフィルムによる】

⑦ 柿衛文庫本 本奥書「天正六霜月下旬 玄仍」奥書に「昭和九年」に写したとの記事あり【国文学研究資料館・マイクロフィルムによる】

(b) 類 (奥書に玄仍の名を有し、かつ、その記述が二箇所あるもの)

⑧ 『榻鳴曉筆』に所収の『肖柏口伝之拔書』(以下、「榻鳴曉筆本」とする)<sup>7</sup>

このように、奥書の形式で系統を分類したが、この分類は諸本の本文を比較したときの異同とも一致している。内容との関連は後述する。奥書等の人物を見ると、宗養、玄仲、玄仍と年代の隔たりがある。生没年を挙げると、宗養は、大永六年(一五二六)～永禄六年(一五六三)。さらに、第一類「宗養本」系統(A)の奥書に見られる「玄仲」は後述する「玄仍」の弟で天正六年(一五七八)の生まれで、奥書にある「慶長十八年」は三十五歳にあたる。「玄仲」は「玄仍」亡き後、里村北家を支えた人物である。第二類の「玄仍本」系統に見られる「玄仍」は、里村紹巴の長男で、里村北家の祖である。里村北家は、昌琢の南家とともに、幕府の連歌師、宗匠家として、柳営連歌の第一の連衆を勤めていく家系であるが、「玄仍」の享年は諸説あり、定かではない。最も長い「三十七」歳説を採ったとしても元龜二年(一五七二)の生まれとなり、天正六年(一五七八)では、八歳という幼年で、疑問が残る。しかし、連歌の「伝書」の性質として、基本に南北朝の時代から代々の連歌師が語り継いできたものがあり、それが時代ごとにまとめられ、書きとめられ、その時代の連歌師の名前が付されていくことを考えると、この「玄仍」の名も史実というよりも「玄仍」が里村北家の祖と認識された時期に仮託されたものであろう。里村北家の初代「玄仍」の名は、書名の「肖柏」とともに、この書の一種の権威付けとして機能

していたと考えられる。また、そのように考えれば、「玄仲」の名も、里村北家の隆盛と関わっているといえようか。いずれにしても、ここに「玄仍」の名が見えることは、この書が流布した時代の影響を暗示していると思われる。

続いて、『肖相口伝之拔書』諸本の内容を見ていくこととするが、諸本を比較するため、便宜的に項目に番号を付した。項目は原則として「榻鳴暁筆本」の「一」に従い、各諸本で同内容でありながら、項目の立て方に違いが生じているときは、一部私意によりまとめ、「榻鳴暁筆本」の項目に沿って、私に数えている。系統ごとの大まかな配列を記したものが【表1】である。表題は、「榻鳴暁筆本」の文頭に従い、大きな異なるものは、表中に示した。「玄仍本」系統の方が項目数が多いため、【表1】は上から「榻鳴暁筆本」（以下、「榻本」と表記する）、「玄仍本」系統、「宗養本」系統の順に記した。

【表1】

「玄仍本」系統 (b)	「玄仍本」系統 (a)	「宗養本」系統 (A)、(B) とも
「榻鳴暁筆本」(以下、「榻本」と表記する)		
(1) にてとまる句の上に置く文字のこと	(1)	(1)
(2) ぞ、か、よの三字	(2)	(2)
(3) 下知の詞	(3)	(3)
(4) 現在の「し」(てと不留候)	(4)	(4)
(5) 過去の「し」	(5)	(5)
(6) 現在の「し」(かなと不留候)	(6)	(6)
(7) 二五、三四の句	(7)	(7)
(8) 見ゆとまりの事	(8)	(8) 見ゆと留候事
(9) くびきれ連歌	(9)	(9)
(10) はや、くちあひのや	(10)	(10)
(11) 句の中に、や文字	(11)	(11)

- (12) 歌にけりと申す心  
 (13) 歌にきやと申す詞  
 (14) ぬとくびに置ては  
 (15) 発句切字十八之事 (句を提示)  
 (16) 同(文法)  
 (17) 大まはし、かしらまはし  
 (18) こそといひては  
 (19) ぞといひては  
 (20) なに、いづく……  
 (21) いつのての事  
 (22) すみのての事  
 (23) 七のやとて  
 (24) 口あひのや  
 (25) 切や  
 (26) 中や  
 (27) 捨や  
 (28) いのや  
 (29) 疑や  
 (30) すみのや  
 (31) 此外……  
 (32) こしのや  
 (33) 下の句にてとゞむる事  
 (34) かけてには  
 (35) きせてには  
 (36) あたりてには  
 (37) らんとめの事  
 (38) 一字はね、二字はなし……  
 (39) もるの句には

- (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39)  
 うけてには  
 「かさねてには」があり、「あたりてには」  
 はナシ  
 この項、「楊嶋晧筆」では一項目だが、玄  
 仍本の系統は、二つの項目になっている。  
 もがなの句には

- (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39)  
 はのや  
 「かさねてには」と「あたりてには」と両  
 方の項がある  
 もがなの句には

(40) つ、どまりの句

(41) むかふも

(42) かさね、又

(43) 地又

(44) 成けり、勢にいりたる詞

(45) こそてにはれ

(46) 八字付所さへ

☆「賦」を中心に諸神を配する図

(47) 発句にかなとめても

(48) 覧とまりの発句

(49) 釈教の発句

(50) てにをは切

(51) 切字のなき発句

(52) いつ、なに……

(53) 大まはし、切字の事

(54) 切字のあたる事

(55) 始々五文字二……

(56) 三所にて三段にきれたる

◎天正六年霜月下旬 玄仍

(57) 脇の口伝の事

(58) 卑下の発句

(59) 述懐の発句

(60) 挨拶の発句

(61) 古事本説等の発句

(62) 第三は  
◎天正六年霜月下旬 玄仍

(40) 『棚本』では、一項目だが、二つの項目になつている。

(41)

(42)

(43)

(44)

(45)

(46)

ナシ

(47)

(48)

(49)

(50)

(51)

(52)

(53)

(54)

(55)

(56) ナシ

◎天正六年霜月下旬 玄仍

(57)

(58)

(59)

(60)

(61)

(62)

(40) 『棚本』では、一項目だが、二つの項目になつている。

(41)

(42)

(43)

(44)

(45)

(46)

このあと、「嫌詞」  
続いて ◎「奥書」となる。

まず、全体を概観すると、系統ごとに項目数に違いが見られる。「宗養本」系統は、初めの(1)から(46)の項目に「玄仍本」系統には見られない「嫌詞」を付し、その後に「奥書」となる。「榻本」の(1)～(46)の内容に加えて「榻本」でない一項目Ⅱ「かさねてには」(36)を有している。「榻本」は、(36)の箇所、「あたりてには」のみであるが、「宗養本」系統は、「かさねてには」と「あたりてには」の二つの項目を有しているため、厳密には四十七項目になるが、番号は「榻本」に合わせるため、(46)までとなる。

これに対して「玄仍本」系統は、番号(1)～(62)の項目から成る。(36)の項では、「あたりてには」の内容を欠き、「かさねてには」のみを有し、さらに「嫌詞」を欠く。しかし、(47)から(62)まで、「宗養本」系統よりも十六項目多く有している。

「榻本」は「嫌詞」を欠き、全六十二項で、基本的に「玄仍本」系統と同様である。しかし、(36)の項で「玄仍本」系で欠いている「あたりてには」を有し、逆に「玄仍本」系に見られる「かさねてには」を欠く。また、系統の境界となる(46)項と(47)項の間に、白抜ききの「賦」という文字を中心とその周囲に諸神の名を配する図が挿入されている。<sup>9)</sup>これは、「榻本」のみに見られる図である。さらに、(56)項と(57)項の間と、巻末の二箇所「天正六年霜月下句 玄仍」の記載がある。「榻本」は「玄仍本」系統の特徴を有しながらも、同系統の諸本とは異なる点が認められる。

#### 四、『肖柏口伝之抜書』諸本の本文比較について

続いて諸本の本文の比較を行うこととする。項目を「榻本」を中心に数えていることから「榻本」を中心として本文の異同を表にした。表は、異同がある場合のみ記し、濁点の有無や平仮名、漢字の違いなど表記上の違いは敢えて記さず、明らかな異同のみを記している。諸本の番号は、三章で記した分類と、また、項目番号は、三章の【表1】に合わせてい



る。ここでは、紙面の関係で特徴が最もよく現れている三例を提示して考察する。  
 まずは、冒頭の箇所を挙げる。<sup>10)</sup>

系統	諸本	番号
「玄仍本」(b)	⑧「棚嶋晚筆本」	一、にてとまる句の上をく「文字」の事。 を、ば、も、からぬ、は此五を何にてもかく。 一も二も一句にをかでは
「玄仍本」(a)	⑤富山図書館蔵・志田文庫本	と留る
	⑥宮内庁書陵部蔵・斑山文庫本	と留る
	⑦柿衛文庫本	と留る 「かで」↓ナ シ(を)□□ は「と」二分 空欄に)留る
「宗養本」(A)	①広島大学文学部国文科研究室蔵本(古典文庫による)	ととまる 「かく」↓替
	②林田良平氏蔵蝸牛廬文庫本	ととまる 「文字」↓「字」 「かく」↓替
	③明治大学付属図書館蔵毛利文庫本	ととまる 「かく」↓候へ
	④妙法院本	ととまる 「かく」↓候へ
		あらし吹 花を夕の涙にて 月を見ば こひしかるべき昔にて 深草も けふたつ秋の風にて 
		と、まるまじく候。 たとへば、 とまる 留る 
		昔にて↓まで (「に」の誤写と思われ る) 
		「秋」↓ナシ 

おしからぬうき身の 行衛哀にて					
*		向後			
~~~~~					
					*「雲のある山はさ ながらけふりにて」 の句がある。
					*雲のある山はさ ながらけふりにて 〔①広島大学本〕 に同じ)
					*雪のある山はさ ながらけふりにて
					*雪のある山はさ ながらけふりにて

(1) は、例句の数が「玄仍本」系統で四句、「宗養本」系統は五句と系統ごとに句数の異なりが見られる箇所である。「宗養本」系統では、一句多く、「宗養本」(A)では、「雲のある山はさながらけふりにて」と「雲」に、(B)では、「雪のある」と「雪」になっている。また、本文の異同は、「宗養本」(A)では「かく」の箇所が「替」に、(B)では「候へ」となるなど、系統ごとに異同が一致していることがわかる。続いて、(8)「見ゆとまり」の項目を挙げる。

(8)	一、見ゆとまりの事 無理には不留候。 よくく分別有べし。 ふ、る、く、し、む、つ、つ、				
③	此七句字の外 不可仕之候。 たとへば下旬に、 あせたる水に 驚のとぶみゆ くる、方より 雨おつる見ゆ ちりゆく花を 人おしむ見ゆ				
②					
①					
~~~~~					
	と留候事 「理」↓「現」 「べし」↓べく候 ぶ、る、む、く、す、 し、つ 「句」↓ナシ 「仕」↓有 池 仮令				
	と留候事 「理」↓「現」 「べし」↓へく候 ふる むく すしつ 「句」↓ナシ 「仕」↓有 池 仮令				
	ととめ候事 ふる むく すしつ 「句」↓ナシ 「仕」↓在 池				
	ととめ候事 ふる むく すしつ 「句」↓ナシ 「仕」↓在 池				

				④
				⑤
				⑥
				⑦
				⑧
				⑨
				⑩
				⑪
				⑫
				⑬
				⑭
				⑮
				⑯
				⑰
				⑱
				⑲
				⑳
				㉑
				㉒
				㉓
				㉔
				㉕
				㉖
				㉗
				㉘
				㉙
				㉚
				㉛
				㉜
				㉝
				㉞
				㉟
				㊱
				㊲
				㊳
				㊴
				㊵
				㊶
				㊷
				㊸
				㊹
				㊺
				㊻
				㊼
				㊽
				㊾
				㊿
				1
				2
				3
				4
				5
				6
				7
				8
				9
				10
				11
				12
				13
				14
				15
				16
				17
				18
				19
				20
				21
				22
				23
				24
				25
				26
				27
				28
				29
				30
				31
				32
				33
				34
				35
				36
				37
				38
				39
				40
				41
				42
				43
				44
				45
				46
				47
				48
				49
				50
				51
				52
				53
				54
				55
				56
				57
				58
				59
				60
				61
				62
				63
				64
				65
				66
				67
				68
				69
				70
				71
				72
				73
				74
				75
				76
				77
				78
				79
				80
				81
				82
				83
				84
				85
				86
				87
				88
				89
				90
				91
				92
				93
				94
				95
				96
				97
				98
				99
				100

(8) は、「みゆ」の上にくる動詞の活用語尾を例句とともに提示している項目である。たとえば、「とぶみゆ」の「ぶ」、  
「おつる見ゆ」の「る」というように、「みゆ」の上にくる「字」を挙げているが、提示される字が六字、七字と系統ごと  
に異なる。七字を提示する「宗養本」系では、「玄仍本」系には挙がっていない「す」が追加されている。そのため、⑤の  
句では、「玄仍本」系の「雲さはぐみゆ」が「宗養本」系では「雲かへすみゆ」となっており、「す」の例に合う例句とし

て提示されている。①の句は、系統ごとに「水」と「池」との異同が、また、⑥の句では「玄仍本」系が「袖の香」、「宗養本」系が「袖ぐち」と異同があるが、それは系統で一致している。(⑥の箇所は、「榻本」は字足らずのため、誤写か、もしくは判断がつかなかったため記さなかった可能性がある。そのため、どちらの系統に近いかは判断できない。)さらに、例句を挙げる順番も「玄仍本」系統と「宗養本」系統では異なる。「榻本」は「玄仍本」系統であるが、「宗養本」系統と同じ順序で例句を挙げている。このことは注目すべきことといえよう。

さらに、(36)の項目を見ていく。

◎「榻鳴 暁筆」に ない部分		(36)
一 かさね てには	一 かさね てには	「あたりてには。 又吹たつは 浪かぜのおと 松かげの あなたの里の 夕煙
一 かさね てには	一 かさね てには	この項全て ナシ
一 かさね てには	一 かさね てには	この項 全てナシ ナシ
一 かさね てには	一 かさね てには	
一、かねてには 木葉よりけに 泪もぞふる	一、かねてには 木葉よりけに 泪もぞふる	この項あり (例句も、二つとも に「⑧榻鳴暁筆本」 と同じ)
一 かねてには	一 かねてには	この項あり (例句も、二つとも に「⑧榻鳴暁筆 本」と同じ)
一 かさねてに は	一 かさねてに は	この項あり (例句も、二つとも に「⑧榻鳴暁筆 本」と同じ)
一 かさねてには	一 かさねてには	この項あり (例句も、二つとも に「⑧榻鳴暁筆 本」と同じ)

(36) の項目は、先にも述べたように、系統ごとに特徴のある箇所である。「榻本」を除く「玄仍本」系統は、「かさねてには」のみである。「かさねてには」の目は、系統ごとに例句に異同がみられる。「玄仍本」系と、「宗養本」系では、一句目の例句で、「木の間」と木の「葉」、「もろなる」と「もぞふる」との違いが見られる。「宗養本」系統は、(A)と(B)で「かねてには」と「かさねてには」と表題の違いはあるが、例句は(A)、(B)とも同じで、系統での一致が見られる。

「あたりてには」の項目は、「榻本」を除く「玄仍本」系統では欠く。「榻本」は「宗養本」系統と異同もなく一致する。以上のことから、『肖柏口伝之抜書』の諸本は、同系統では、異同が少なく、系統ごとに統一されているといえる。諸本を奥書の形式で分類したが、内容の検討によってもその分類は妥当であるといえるだろう。伝書というものの性格上、諸本に違いが生じるのが通常だが、『肖柏口伝之抜書』は、共通の奥書をもつ諸本での異同は、非常に小さいといえる。項目の区切り方でも〔表1〕(38) (40) 参照、同系統の諸本では一致しており、系統ごとに確固とした共通性が見られる。

このような中で「榻本」は、原則的には「玄仍本」系と一致しながら、「宗養本」系に近い箇所が見られる。「榻本」の基となる「玄仍本」と「宗養本」を校合した諸本の存在が推定される。<sup>11)</sup>これに関しては、注で述べておく。

## 五、『肖柏口伝之抜書』に引かれる句について

ここで、『肖柏口伝之抜書』に引かれる句を検討し、『肖柏口伝之抜書』の成立した時期を考えてみたい。『肖柏口伝之抜書』に引かれる句は、『一紙品定』、『知連抄』、『連歌諸躰秘伝抄』、『連歌秘袖抄』、『雨夜記』等の伝書類、『菟玖波集』、『竹林抄』等の連歌撰集、『壁草』、『那智籠』等の句集、さらに千句や百韻など幅広い年代のものと重なる。その中で時代の下限のものに注目すると、宗長時代の句がいくつか引かれていることに気づく。その典拠を挙げると、例えば『月村斎千句』、

『住吉千句』、『伊勢千句』、『伊庭千句』、『壁草』、『那智籠』、『老耳』、『永正十二年十一月十一日の百韻』や『宗牧百韻』（大永七年一月十八日）と重なる句が見られる。中でも、『伊勢千句』が目立つ。これらは、宗長やその周りの宗碩、聴雪らの句である。永正から大永にかけての宗長の句が多く、宗長の影響力の強い時期の成立が窺われる。

## 六、『肖柏口伝之抜書』と『肖柏伝書』や『宗長てには』の関係について

最後に『肖柏口伝之抜書』と『肖柏伝書』や『宗長てには』の関係を見ておきたい。『肖柏口伝之抜書』はその書名から、何かの「抜書本」とも想定できる。そこで、肖柏の伝書といわれ、辞書等でも関係が指摘されていた『肖柏伝書』との関係を確認したい。『肖柏伝書』は『連歌論集四』<sup>②</sup>所収の「龍谷大学本」と比較する。『肖柏伝書』は、前半と後半の二部分に分かれている。前半の内容は、連歌全般についての知識や心得で、宗祇や兼載の句を挙げている。後半の内容は、いわゆる「てにをはの事」についてで、いかにも伝書らしい内容である。「是は宗祇（公）より連々承候をえらび侍りし」と、これらの内容は、宗祇の教えの中から、特に重要なものを選んでものとして、「てにをは」に關することが十四項挙げである。『肖柏口伝之抜書』と類似が認められるのはこの『肖柏伝書』の後半部分のみで、『肖柏口伝之抜書』全体の六十二項目（玄仍本）の中で、この十四項目のみである。また、この十四項目は、『肖柏口伝之抜書』の初めの部分（一）～（14）に該当するが、同じ配列になっているわけではない。また、挙げてある例句の異なりや本文の異同も大きい。先に述べたように『肖柏口伝之抜書』が系統ごと統一されていたことを考えると、『肖柏口伝之抜書』と『肖柏伝書』との直接的な書承関係は薄いのではないか。『肖柏口伝之抜書』が『肖柏伝書』の後半十四項を核として、配列を変え、さらに増補していった可能性もないわけではないが、『肖柏伝書』との直接的な書承関係というよりは「伝書」という大きな一群の枠組みの一端の現れが『肖柏伝書』の後半部分であり、『肖柏口伝之抜書』であるといえようか。このように、「伝書」という大きな

一群の現れと考えれば、両者に共通性があってもおかしくはない。しかも、枠組みは共通するが、配列や、本文、引かれる例句に違いも見られるため、直接的な書承関係ではないと思われる。

また、この『肖柏伝書』に引かれる句には、宗祇と兼載の句が多い。『肖柏伝書』には七十三の句があるが、そのうちの二十六句が宗祇、兼載に纏わるもので、『肖柏口伝之拔書』と一致しない前半部分に集中している。同じ句が複数の句集や連歌書に入っていることもあるが、主な物を挙げると『心敬専順点宗祇付句』三句、『萱草』七句、『老葉』十句、『下草』二句、『兼載雑談』二句、『園塵』（全巻二）九句と、宗祇、兼載の句集から引かれたと思われるものが多い。『老葉』に次いで前期の宗祇句集である『萱草』やその基となった『心敬専順点宗祇付句』から引いていることは興味深く、宗祇の前半の句集に造詣の深い、宗祇に近い人々が編纂に関与していたと思われる。また、『肖柏伝書』には、宗長の句は見あたらない。『肖柏口伝之拔書』の後半部分で、『肖柏伝書』の内容と関わらない箇所にも、宗長の句が引かれていたことを考えると、『肖柏伝書』と『肖柏口伝之拔書』は、重視する句が異なり、編者に違いがあると考えられる。

さらに、『肖柏口伝之拔書』の類本とされる『宗長てには』との関係を考察する。『宗長てには』は、「京都大学文学部国語国文学研究室蔵本」を用いて比較した。先に挙げた『連歌論集四』の「肖柏伝書」の解説<sup>13</sup>の中で、この『宗長てには』は、『肖柏伝書』の諸本の一つとして取り上げられている。解説では、書誌の説明の後、「肖柏伝書の後半の「てにをは」に関する項が独立して流布したもの」として、「本書の校合に使用」したことが記されている。『宗長てには』を確認すると、合綴本であり、後半は、表題も記されないまま『七人付句判詞』になる。本文の前に「山門東塔南谷 浄教坊 真如蔵 二百廿八 善」とあり、続いて「宗長てには 宗碩」と記す。比較すると、本文に細かな異同はあるが、『肖柏伝書』の後半十四項と配列、内容とも一致し、全ての句が重なる。また、十四項目の後にこれも小異はあるが、『肖柏伝書』と同様の奥書がある。但し、『肖柏伝書』末尾の「右一帖、從三宗長被レ出候以レ本書ニ写之」。(中略)……又、口伝也」は見られない。ここに奥書の記載があり、『肖柏伝書』の内容はここまでで終わるのであるが、この後にさらに典拠不明の「一、鉢

用事用格」以下、十四項が続く。前の内容とのつながりは不明で、さらに「御熊野」として、和歌を挙げたあと、表題もな  
いまま、『七人付句判詞』が合綴されている。『七人付句判詞』からは、筆跡が変わっているように感じられる。その後、  
奥書が「於日光山書之暫時 筆者不動坊円英 寛永十五 五月廿五日 校了」とある。

このことから『宗長てには』は『肖柏伝書』の後半の十四項と、配列、奥書ともに一致し、さらに、引かれる句も一致  
することを確認した。書名は異なるが、『連歌論集』の解説の通り、『宗長てには』は『肖柏伝書』の諸本の一つとして『肖  
柏伝書』＝『宗長てには』として扱うべきと思われる。

## 七、まとめ

以上、『肖柏口伝之拔書』の諸本を奥書で分類し、諸本間の比較を行った。その結果、同系統のものでは、本文の異同が  
ほとんどなく、系統ごとに統一があること、奥書での分類が内容の検討からも、妥当な分類であったことを確認した。ま  
たその中で奥書にも特徴があつた「榻嶋暁筆本」は、「玄仍本」系統に属しながらも「宗養本」系統に近い箇所があり、両  
系統の特徴を合わせ持つ一本であることを指摘した。また、『肖柏口伝之拔書』を引いている書との関係から、「榻嶋暁筆  
本」と類似した形の『肖柏口伝之拔書』の存在を想定した。「榻嶋暁筆本」の有り様は連歌伝書の生成と変容の問題にも関  
わるであろう。

また、『肖柏口伝之拔書』と『肖柏伝書』の関係、『宗長てには』の関係を考察し、『肖柏伝書』と『肖柏口伝之拔書』の  
違いを指摘した。『肖柏口伝之拔書』に引かれる句は、宗長の句が多く、その典拠は『住吉千句』、『伊勢千句』、『伊庭千句』  
等に及ぶ。このように永正から大永にかけての宗長全盛期の句が多いことから、宗長の影響力が強い時期、宗長没後でも  
早い時期の成立が窺われる。これらに関しては、今後の課題にしたい。



- (1) 本稿は、「榻嶋暁筆」に引用された「肖柏口伝之拔書」について」として、二〇一四年九月六日「平成二十六年度 伝承文学研究会大会」(於 青山学院大学)での口頭発表を基にしている。「榻嶋暁筆」諸本と「肖柏口伝之拔書」の問題を扱ったものに、滝澤みか氏「『榻嶋暁筆』の諸本に関する一考察」(古典遺産64号 二〇一五・三月)がある。
- (2) 木藤才蔵編『宗養連歌伝書集』(古典文庫493) P417
- (3) 『俳文学大辞典』(角川書店)「肖柏口伝之拔書」の項(綿拔豊昭氏)
- (4) 『俳諧大辞典』(明治書院)「肖柏口伝之拔書」の項(伊地知鐵男氏)
- (5) 「注2」所収の「肖柏口伝之拔書」の翻刻による。この解説の部分で、「明治大学図書館付属図書館蔵毛利文庫本」の奥書を「宗長判」とするが、「宗養判」の誤りと思われる。
- (6) ⑤、⑥本は、宗祇(仮託とされている)の『秘伝抄』と合綴されている。また、⑤⑥⑦本は、ともに内題に「夢庵之御事 肖柏口伝之拔書」とある。また、⑦「柿衛文庫本」は、福井氏の蔵書印があり、奥書に「小松園」とあることから、他本との関係を今後調査したい。
- (7) 引用は、市古貞次校注『榻嶋暁筆』(中世の文学・三弥井書店)によったが、『肖柏口伝之拔書』を収録する「国会図書館本」、「鈴鹿文庫本」、「京都大学文学研究科図書館蔵本」(以上、二十三巻本)、「神宮文庫本」、「京大本」(以上、二十巻本)を参照した。
- (8) 諸説の問題については、福井久蔵氏『連歌史的研究』(有精堂・昭和四十四年十一月)、小高敏郎氏『ある連歌師の生涯』(至文堂・昭和四十二年十二月)、両角倉一『連歌師紹巴―伝記と発句帳』(新典社・平成十四年十月)に詳しい。「注1」に挙げた滝澤氏の論文でもこの問題は取り上げられている。
- (9) 「榻本」の図について確認しておく。図は「賦」の文字を中心に諸神を配している。「榻本」以外の『拔書』に確認できず、管見に入った中では他の伝書等にも見られない。但し、『榻嶋暁筆』諸本の「肖柏口伝之拔書」には全てこの図が挿入されている。図は中心に「賦」と大きく白抜きで示し、その周りを取り囲むように「八幡」、「伊勢」、「諸神」、「日月」、「諸仏」、「祇園」、「御刀」、

「稲荷」、「御太刀」、「摩利支天」、「春日」、「賀茂」、「人丸」、「赤人」、「天神」を配している。(向きの異なりはあるが、「傘連判」を連想させる図である。)'人丸」、「赤人」、「天神」など、歌の神が配され、法楽・奉納に関わると思われる。ここで、「摩利支天」と「御刀」、「御太刀」に注目する。「摩利支天」は、経典類や説話でも多数確認できる。多くは、帝釈天と阿修羅の戦いをめぐる摩利支天の働き、日月を助けて勝利に導いたこと、そしてその力、隠形の術に関することである。(「榻鳴曉筆」にも阿修羅との戦いの説話がある)。また、説話等でも軍神として、護身の神として、隠形の術の力として現れている。「摩利支天」と「太刀」、「八幡」等の関わりは、奉納の太刀の銘からも確認できる。山形県、立石寺所有の「太刀 無銘伝舞草 鎌倉初期」(山形県指定有形文化財昭和三十八年三月二十九日指定)には刀身の表に「立石寺山王御太刀 南無摩利支天」、裏に「南無八幡大菩薩」とある。また、長崎県大村市には、奉納した太刀を摩利支天として崇めていたとする伝承がある。(藤野保 著『大村郷村記』第一巻・国書刊行会・昭和五十七年による)

また、諸神の配し方は、『阿婆縛抄』第一六六の「冥道供」にある図に、ここで配されている諸神が入るものが見られる。この「榻本」の図に関しては、今後の課題があるが、「摩利支天」の性格から武士階級との関わりも窺え、享受の問題と関わりをいえよう。

(10) この系統ごとに一致する傾向は、全体に現れている。

(11) 『冑柏口伝之抜書』を引用していると思われる『連歌てにをは口伝』について検討したい。『連歌てにをは口伝』は全体が四部に分かれ、さらに各部にそれぞれ奥書を有している。このうちの第二部、第三部に「天正六年霜月下旬 玄仍」の奥書がある。第二部、第三部と『冑柏口伝之抜書』を比較してみると、第二部は初めの七項目以外は、『抜書』の(47)～(56)と(但し(49)と(53)、(55)の内容は見られない)、本文に細かな異同はあるが、配列、例句ともに、全て一致する。また、第二部はこの(56)の記事で終わり、奥書を付すが、これは「榻本」の一回目の奥書の位置と一致し、さらに、奥書も、「天正六年」と「年」をつけることまで「榻本」と一致している。また、(47)は、「榻本」と「玄仍本」系の諸本とで本文の異同が見られる箇所だが、それも「榻本」と一致している。

第三部は、抜書の(57)～(62)と一致する。(62)の箇所では、平句の「うちなびくかげ」の上の七文字が「榻本」では抜けているが、この抜けている箇所まで一致する。そして(62)の内容の後、奥書になる。

このように『連歌てにをは口伝』の第二部、第三部は、奥書の位置が「榻本」と一致すること、「榻本」と「玄仍本」系で異同

がある箇所では「榻本」に近い本文であったことが確認できる。

以上のことから、現在、『冑柏口伝之抜書』として現存しているものでは「榻本」と同様の諸本はないが、「榻本」と類似した形の『冑柏口伝之抜書』が存在していた可能性がある。それは、初めから(46)までの一紙があり、次いで(47)～(56)までの一紙、さらに、(57)から最後の奥書までの三つのものであったと想定できる。「榻本」は、この三つのものを写書したか、それがすでにまとめられていたものを書写した可能性があるといえよう。「伝書」の性格として、その書の基本的な型があり、そこから内容を増減させ、配列や例句を変化させるといえることが行われていたと思われるが、「榻本」は、このような伝書のあり方を示す例といえようか。

\* 『連歌てにをは口伝』は、永津陽子氏「翻刻『連歌てにをはの口伝』」(『国文目白』22・昭和五十八年三月)による。

(12) 『連歌論集四』(中世の文学・三弥井書店)

(13) 注(12)のP.27からの解説による。

(本学非常勤講師)